

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	コミュニティ福祉学研究科	コミュニティ福祉学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻博士課程後期課程1年	富川 亜紀子 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科教授	森本 佳樹 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題名	生活の支え合い（ソーシャルサポートネットワーク）の実証的研究		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻博士課程後期課程1年	富川亜紀子	
研究期間	2010年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

この研究は、地域で生活する視座に立ち、暗黙知を含む地域の文化や伝統、価値や掟などに触れながら、これらを背景とした生活の支え合い（ソーシャルサポートネットワーク）について民俗学的なアプローチにより実証的に明らかにすることを目的とする。調査地は沖縄県多良間島で、島の伝統行事や生活場面における参与観察と医療・保健・福祉の専門職者らへのインタビュー等を通して人々のつながりを理解することに努めた。結果、島には様々な所属集団が存在し、ゆるやかなつながりで離島の生活苦を乗り越えるために機能していることも読み取れた。一方、どの集団にも所属していない（かのように見える）孤立した人も存在していることも見えてきた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[地 域 福 祉] [ソーシャルサポートネットワーク] [生活の支え合い]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**【研究目的】**

本研究では地域特性に沿った個別具体的な実証的研究を行うことにより、私たちが続けてきた、或いは失ってしまった“生活の支え合い”についてその背景、歴史、現状、課題、可能性(発展性)について述べ、これからの地域福祉が目標とする「地域においてあるべきネットワーク」の姿を浮かび上がらせる。

今年度の調査地は沖縄県宮古郡多良間村(多良間島)に設定した。島に数週間滞在し、地域の生活文化様式等を踏まえた高齢者の生活(他者や地域との関わり方)、子育て世代の生活等について参与観察を行い、社会資源の限られた島で、多良間島の人々がいきいきとしている理由(社会文化的、経済的環境等も含めて)と生活課題について明らかにしようとした。

【研究方法】

1. 文献研究 一多良間村立図書館にしか所蔵されていない文献を中心に行った。

多良間村に関する文献や資料(村史資料編、個人史、随筆集、郷友会誌など)をもとに、多良間の歴史・文化・風土等について研究を行った。また、資料では理解しにくい事象を明らかにするために、多良間村立民俗資料館にて専任職員からレクチャーも受けた。

2. フィールドワーク ーフィールドワークは主に次の三点を中心に展開した。

(1) 日常生活場面の参与観察

(2) 伝統行事(「八月踊り」など)での参与観察

(3) 医療・保健・福祉専門職への半構造化されたインタビュー結果と実際に起こっていることの比較

【研究成果】**1. 社会集団の形態が多様である**

多良間には他の自治体同様の村の行政組織の他に伝統行事を行う祭祀組織がある。村の行事(近代的なイベント)は、毎年、伝統行事の“邪魔”をしないよう日程が組まれるほど、祭祀組織は島の生活に大きなウエイトを占めている。

大きく2種類に分けてみると、字(仲筋・塩川)単位でグループを組織するニサイガッサ(二才頭)とツカサンマ(司母)を中心にした祭祀集団と、イエ単位で行う祭祀集団がある。前者は主に農耕儀礼といったムラの伝統行事を執り仕切り、後者は一族の先祖の弔いや家族の安泰祈願を行うことを中心に活動している。

多良間では祭祀の内容によって所属する集団が変わり、また、これと言った取り決めのない集団活動(イム°ウブナカアグ、共同墓など)もある。そのため祭祀集団が多数存在し、一人が複数の集団に所属することになる。それは単純に地理的に区切ることはできず、またムートゥ(本家)が一緒でも、必ずしもすべての活動で同じ集団に所属しているともいえないため、イエ単位で区切ることもできない。

そのためか、島の住民の「みんな親戚だから」「親から“みんな親戚だから”と言われても、どこの家とどんな関係の親戚なのかはわからない。」という発言が必ず聞かれる。

島では年間を通して皆で協力し合って祭祀活動を行うことが多く、それが継続して300年以上も営まれてきた。島の住民らには「場」「トキ」「コト」を共有する多良間独自の歴史文化が育んできた仲間意識(風土)が根底にあると推察でき、当然そこには自然発生的な生活の支え合い(例えば子育て)も存在している。

その他にも、ユイ(共同作業)のグループがある。戦後、現金経済の波に飲み込まれると貨幣と交換できる農作物(サトウキビ)等の生産の場でのユイマールが始まる。ユイマールのグループは当初、部落(区)の中で近隣同士5~10世帯でグループ分けされていたが、高齢化や兼業農家への移行が進むと「職場の同僚」「同級生」といった「仲の良い人と組む」スタイルへと変化してきた。世代交代すると必然的にユイのメンバーも変わってくる。

このように多良間の「支え合い集団(Support Group)」は厳格な規則に縛られておらず、また流動的で多様な形態とであることから、開かれたゆるやかな集団であることが見えてきた。

2. 良くも悪くも「家族主義」

「年老いた親は子が養老する」という意識が強い。それは、島で終末期を迎える高齢者が少ないこと(介護支援専門員の話では、ここ10年で4件)の理由の一つになる。島では中学を卒業したら進学のために島を離れなければならない。島を出た子どもがまた島に戻ってくることはあるが、多くは宮古島や沖縄本島で生活の基盤をつくり、家族をもうける。そこへ年老いたために島での自立した生活が難しくなった親を呼び寄せるのである。

研究成果の概要 つづき

高齢者数人に聞くと「息子が那覇にいたのでそこに行くつもり」「娘が来なさいと言ってくれているから」と、子どもが面倒を見てくれたり、家族と暮らせたりの喜びが表れていた。住み慣れた島を離れる寂しさはないと言えば嘘だが、「周りに迷惑掛けたくない」という気持ちの方が強く、“自分の力で生活できるギリギリまで島で生活し、それができなくなれば子どもの所に行く”というスタイルが島に残っている高齢者が抱く「老後モデル」となっているようである。また、子どもらの意識も高く年中行事に合わせて帰島した際は、近隣住民や親戚らへ挨拶回り等を行い“支え合い関係の維持”のための役割を果たしており、親が元気なうちの島生活を支えている。

一方この意識は、一部住民の生活の課題解決に逆機能を起こしている。島での生活で問題が発生した場合は、離島していても、まずは家族へアプローチするのは当然である。しかし、明らかに家族関係が破綻している要援護者に対し、地域や公的機関（専門職者ら）の間に「家族がいるから」という意識が強く働き、必要な支援が出遅れてしまうケースが見受けられた。

岡村は「相互扶助とか隣保相扶は、『よその』(他所者)に対しては、援助の原理になりえない。これが相互扶助の限界」(岡村 1983)と述べているが、「島の人はみんな親戚」という意識がある反面、「家族がみるべき」という意識も強いがために、「よその」ではないのに、「援助の原理」に包み込まれない人がいる。なぜそのようなことが起こっているのかを明らかにすることはできなかった。

3. 様々な「助」の形態 (伝統行事、生業などにみる支えあい)

多良間島と同じくサトウキビを基幹作物に位置づけている波照間島のユイマールを研究した宮西 (2005) の研究で述べられているような厳格な取り決めは見られないが、「作付面積がほぼ同じであること」「大きい所は賃金を支払うこと」などの対等性への“暗黙の了解”は存在していた。また、(対等性を保つために) ある程度システムティックであることから、この形は「共助」に当たると考えている。

さらに、畜産業ではサトウキビのユイマールほどの対等性は求められていない。必要な人が声を上げれば、誰かが手を上げて助ける。その経験が繰り返されて積み重ねられてきたので、声を上げなくても自然と手が差し延べられている様子も観察された。約束されたものでなくても、必要な時に必要なサポートがなされていたこの形は「互助」に当たるといえる。

また、その他にも「子育て・人育て」と「子育て・人育て」の風土 (伝統芸能を通しての島人育てや、守姉文化) や、「ライフステージにおける経済面での相互支援のループ」(模合い、〇〇祝いなどを通しての社会保険的機能を果たす経済活動) などが見られた。

これらの背景に共通して見えるのは、小規模離島という環境から派生する生活の不便さ、生活苦を皆でカバーし合う、支え合おうとする「知恵」である。

【残された課題】

島民の中には、祭祀 (社会) 集団等に所属することもなく、離別等により島に家族もいないという状況下に置かれている人がいる。そのような状況に加えて、沸き起こっている生活課題において経済的困難や心身の疾病・障害が同時に派生し、多問題化している人も見受けられた。近隣住民 (他の島民) はその状況に気づいていないわけではない。かといって積極的にサポートを行っているわけでもない。「放っておく」「関わりたくない」というよりも、むしろ支援の手を差し出すことに二の足を踏んでいるかのように見えた。

「家族、親戚がいるのに、どうして私たち (他者) が面倒をみなければならないのか」という悪い意味での家族主義が、“孤立し困難を抱える人を地域で支え合う”というステージまでの壁を厚くさせている。しかし、それはあくまでも調査者の主観であって、この考えの根底にある多良間島の「生活者の論理」を見いだせるまでには至らなかった。

なぜこのような状況を抜け出せないでいるのか? 或いは、そう言うおきながらも (「多良間のすごいところは、問題を問題にせず、なにげなく解決していくところ」という住民の発言に現れるような) 実際には見えないところでなにかしらのサポートが機能しているのか? 本研究に残された課題は大きい。

参考文献等

- 宮西郁美 (2005) 「波照間島ユイマールにみる協同労働組織の実態と新たな機能」農業経済研究
 岡村重夫 (1983) 『社会福祉原論』全国社会福祉協議会

※ この (様式 2) に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書 (A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式) を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

③ シンポジウム・公開講演会等

「沖縄先端学」(講義), 2010年11月29日, 沖縄大学

④ その他 (学会発表, 研究報告書の印刷等)

「日本社会福祉学会九州部会大会」2011年6月18日～19日 (発表予定)